

【目的】保険薬局において、認知症患者の症状や、日常生活、また、認知症症状に大きな影響を与える患者と家族との関わりについて具体的に聴取できないことが多い。そこで、患者家族に調査を行い、患者や家族に保険薬剤師としてどのようなサポートができるかを検討した。

【方法】患者家族へのアンケートと認知症症状の確認票（生活のご様子確認票（株）エーザイ）を用いて以下を調査した（n=29）。①行動異常の気付きから受診までの期間 ②現在の認知症症状について ③認知症診断後の家族の行動変化について

【結果】①家族が言動の異常に気付いてから、受診するまでに3ヶ月以上経っている患者が60%近くおり、そのうち1年以上は30%であった。②約60%の患者（17名）が確認票において高度に当てはまった。今回の調査結果とアリセプト錠[®]の投与量を比較したところ、高度に当てはまった患者で10mgを服用している患者は2名であった。③認知症の診断後に患者を一人きりにする時間が減ったと回答した家族は全体の70%だが、家族との会話・外出が減少した家族はそれぞれ約30%・60%であった。また、認知症に関する情報収集が増えた家族は65%であった。

【考察】言動の異常に気付いてから治療に至るまでに時間の長さから、認知症の初期症状の早期発見と早期治療の必要性を薬局で啓蒙することや、専門医を紹介することは意義があるといえる。保険薬剤師が簡易ツールなどを用い患者症状を把握することで適正な薬物治療がおこなわれているか確認でき、患者と家族との関係性を把握することで必要に応じた提案ができると考える。また、家族は情報収集についての意欲が高いことから、患者個々に応じた情報を積極的に提供することで患者や家族のサポートができるといえよう。